

聴覚障害者の外国語学習

松藤みどり

1. 聾教育の中で軽視されてきた英語

聾学校の中で戦前から英語を設置していたのは東京聾啞学校（現・筑波大学附属聴覚特別支援学校）のみであった。昭和2年に文部省に認可された「東京聾啞学校規則」によれば中等部普通科では第1学年から第5学年まで、講読、語法、作文、習字が週1時間ずつ、計4時間指導されていた（「東京教育大学附属聾学校－その百年の歴史－」）。

昭和22年3月31日「教育基本法」「学校教育法」が公布され、4月から新学制による小学校、中学校が発足した。東京聾啞学校はさっそく英語の授業を再開し、中学部で各学年70時間から140時間、つまり週あたり2時間から4時間、高等部普通科では175時間、週あたり5時間の指導が開始された。

英語を設置する聾学校は増加し、昭和50年には50を超える聾学校で英語が履修されていた。しかしながら、学年対応で授業を進めていたのは、ほんの一握りの聾学校にすぎなかった。

ほとんどの聾学校では週あたりの時数が少なく、日本語もままならないのに英語なんて「むりだ、むだだ、むずかしい」と考えられていた。

「一体ろう学校の生徒に英語を教えて何の実益があるのか。また、国語をマスターするだけでも散々苦勞している、それでいて、その国語力は普通の人にくらべて大分開きがある生徒たちに、この上にも外国語学習の負担を加重することが合理的なことか、これはろう教育関係者の誰しもが最初に抱く素朴な疑問であるようである。」（中西喜久司「聴覚障害と英語教育」）

聴覚障害者の海外旅行など夢のまた夢だった時代、補聴器の性能も未発達で聴能や発音の指導が難しかった時代には、英語の前にまず国語、否、それよりも手に職をつけるのが先、という考え方が強かった。聾学校高等部は「職業科」であり「普通科」は少なかった。附属聾学校でも高等部本科がすべて「普通科」になったのは昭和50年のことである。

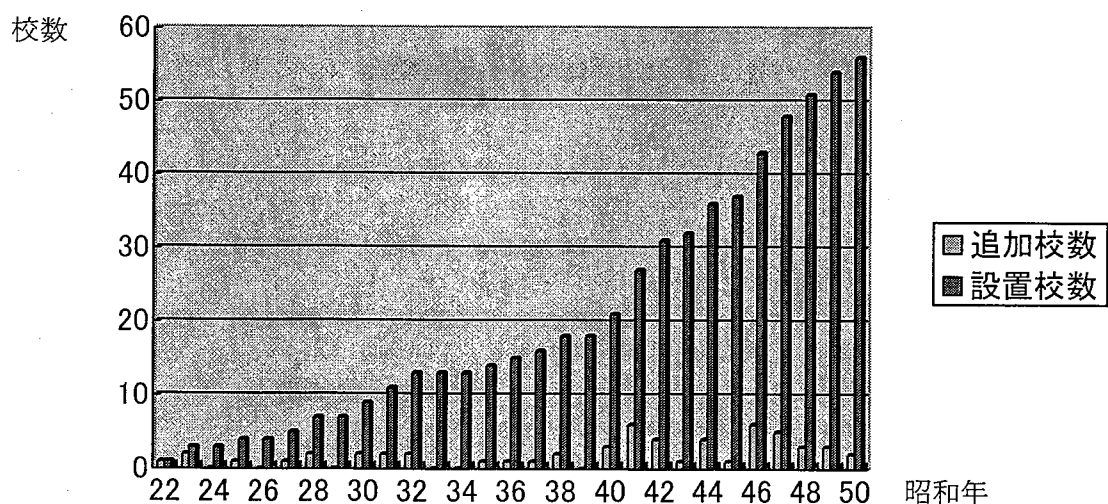


図1. 聾学校における英語の設置の推移

（中西喜久司著「聴覚障害と英語教育」の資料よりグラフ作成）

2. 聾教育における英語の重視

昭和 50 年代と比べると、今日の聴覚障害者を取り巻く環境は大きく変化した。

雇用促進法の恩恵で就労状況が変化して、生活が豊かになった。一般の人と同様に海外旅行にも行くようになり、国際交流が珍しくなくなった。聾学校にも ALT が配属され、外国人と直接話をする機会にも恵まれるようになった。また、大学進学も増えて英語は重視されるようになった。奨学金を得て留学する制度もでき、実際に英語を使う機会を視野に入れて学習することも可能になった。インターネットを用いれば、海外の情報を入手することも簡単にできるよ

うになった。

文部科学省は「改訂新しい学習指導要領」の中で 6. 国際化への対応 として【中学校及び高等学校で外国語を必修とし、話す聞く教育に重点。小学校でも「総合的な学習の時間」などにおいて英会話などを実施。】としている。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301i.htm

外国語の授業時数は中学校各学年で 105 時間（週 3 時間）とされた。聴覚障害英語研究会では全国の聾学校中学部に対してアンケート調査を行い、英語の指導時数を調べた。結果を図 2 に示す。

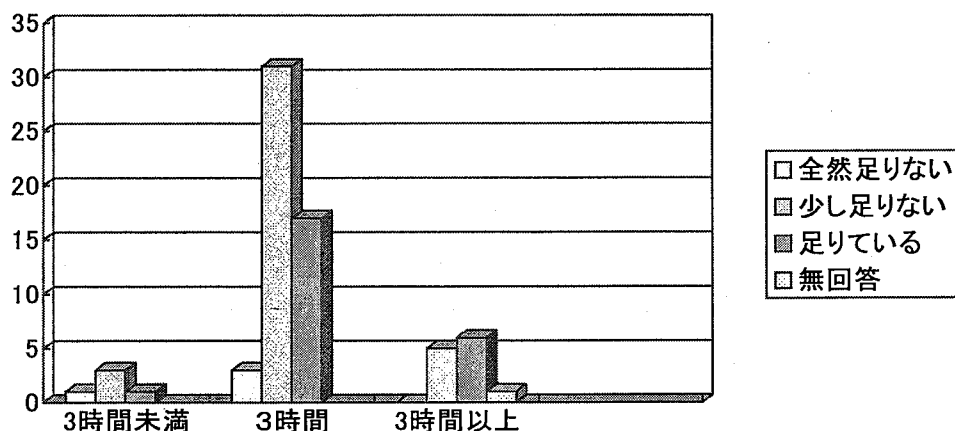


図 2. 聾学校中学部での英語の指導時数（平成 8 年 聴覚障害英語教育研究会）

新しいカリキュラムを作るさい、標準指導時数を上回る時数を英語に割り当てた聾学校が少なくない。それは英語教師のみならず学校全体が英語の重要性を認識した結果に他ならない。高等教育への志向が高まったことがその要因のひとつと考えられる。英語の授業の他に「総合的な学習の時間」などにおいて ALT による指導を入れたり、小学部においても ALT を活用したりする例が報告された。

この調査ではこれから重視すべきととして現場の教員から次のことがあげられた。（数値は件数を表す）

1. 基礎学力の充実 60
2. 視覚を使った教材の工夫 50

3. 授業内容の精選 43
4. 英検などの資格取得 29
5. 授業時数の確保 26
6. ネイティブの英語教師の導入 21
7. パソコンの導入 21

平成 17 年度に高等部 9 校に対して筑波技術大学が行った聞き取り調査では、

辞書の使い方
長文読解の指導
文法、
大学入試対策

などが課題として挙げられた。また、指導内容や到達状況について、英検の級をもって示されるという特徴があった。

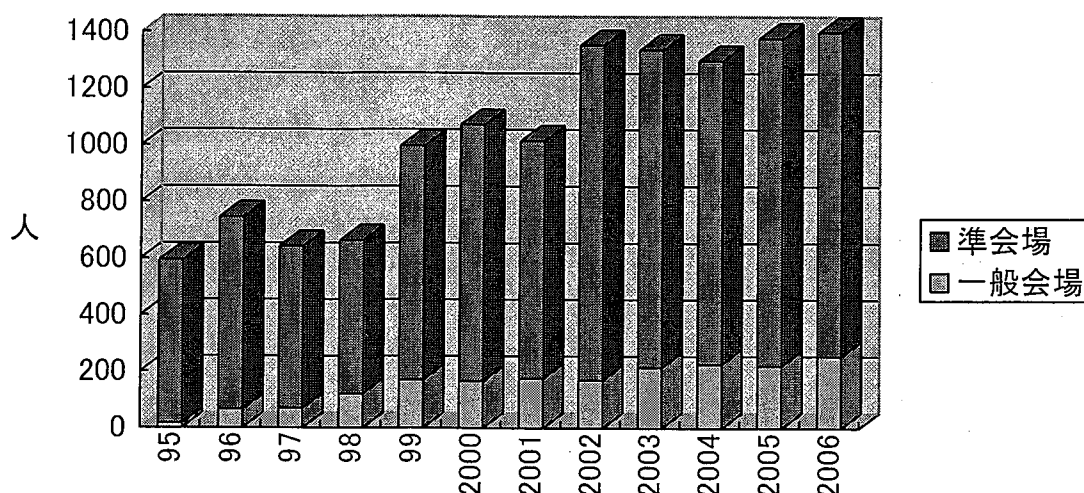


図3. 聴覚障害者の英検受験者数 (日本英語検定協会資料より作成)

3. 英検の改革と聴覚障害者の学習の意欲

「英検」は日本英語検定協会が実施している全国的な英語能力検定試験である。試験の中に含まれるリスニングは、関係者の長年の働き掛けにより、文字テロップによって受験することができるようになった。この結果、聴覚障害者の受験者が増加した(図3)。

英検の特別措置によって聴覚障害者の受験意欲は高まり、取得する級も上がった。高等部で2級を取得することが珍しくなくなった。筑波技術(短期)大学に入学した学生の取得級を表1に示す。

表1・新入生約50人の英検の取得級

年 度	2 級		準 2 級		3 級		4 級	
	普 通	聾	普 通	聾	普 通	聾	普 通	聾
10	0	0	0	0	2	7	2	13
11	0	0	1	0	5	9	3	12
12	0	0	2	0	6	7	3	4
13	0	0	0	1	3	5	6	8
14	0	0	1	3	4	14	3	9
15	0	0	2	5	3	10	0	10
16	1	0						
17	0	2						
18	1	2	5	7	7	6	4	2
19	1	3	4	5	5	9	1	4

聾学校(特別支援校)のみならず普通校出身者の英検取得も多くなった。このことは特別措置の存在が広く知られるようになったためと考えられる。

4. 英語以外の外国語

(1) アメリカ手話

聾学校の英語の授業に手話を取り入れようという動きは、一時期は非常に活発だった。ASL という英語とは文法が異なる手話を取り入れるかがよく議論された。アメリカ手話を取り入れる試みは、さまざまな聾学校で行なわれてきたが、問題点としては次のことが挙げられる。

1. 普通校から来て日本手話も知らない生徒には日本手話だけでも大変なのに、更にアメリカ手話を指導するのは過重な負担になる。
2. 教師自身がきちんと指導できるほど手話を知らない。
3. ASL は聾の生徒にとって魅力的で興味を引くが、学力の向上に繋がったという証拠はまだ得られていない。
4. 対応手話を用いたからといって、英語が身につくものでもない。

筑波技術短期大学ではアメリカの大学生との交流があることなどから、英語の時間に ASL

を指導して欲しいという学生からの要求が強かった。四年生大学になり、ASL を第二外国語として二年生で選択できるようにし、英語と切り離して独立した言語として指導することができるようになった。

(2) 高等教育における第二外国語の学習

第二外国語は一般的に高等教育段階で始まる。しかしながら「大学設置基準の大綱化」により、大学は科目を自由に構成できるようになった結果、第二外国語の設置は減少している。

筑波技術大学では二年生で第二外国語として、アメリカ手話、ドイツ語、フランス語から1科目選択をさせている。今年度の履修のために昨年度末に二回にわたって履修希望の調査を行い、受講者の調整を行った。選択希望者数は以下のとおりであった。1クラス 15名を上限としているので、第二希望を参考にして受講者数の調整を行った。

表2. 平成19年度第二外国語選択

		ASL	独語	仏語	不明
1 回	第一希望	24	13	11	2
	第二希望	12	19	17	2
2 回	第一希望	23	19	7	1
	第二希望	8	19	23	1
受講者		25	14	11	0

ドイツ語とフランス語の指導者は非常勤講師で、手話を使用しない。授業中の指導者と学生の発言は、ボランティアのパソコン入力によって文字で提示する方式を導入した。

聴覚障害者が学ぶ一般の大学でも情報保障体制は整いつつあるが、外国語についてはまだ十分な保障はされているとはいえない。第二外国語がきちんとした情報保障を伴った体制で学習できる機関として、筑波技術大学は貴重な存在であるといえよう。

5. 日本語の上にある外国語

英語の授業を学年対応の教科書を用いて指導している聾学校は増えてきている。筑波技術大学に聾学校から入学する学生もほとんどが高等学校の英語Ⅰおよび英語Ⅱを履修して

きている。しかしながら、授業中に日本語のチェックを意識して行う必要がある。

例1：その山の頂は、雪でおおわれているように見えた。[covered, looked, mountain, of, snow, the, the, top, with]

() + () + () + (雪で).

↑

(その山の)

「イタダキ」という読み方を知らず「頂」を「チョウ」と読む学生がいた。

例2：トムは、彼の友だちのジムと同じくらいに気前がよい。

[as, as, friend, generous, his, is, Jim, Tom]

(トムは) + (同じくらい気前がよいです)

+ (彼の友だちのジムと).

→Tom is as generous as his friend Jim.

「気前がよい」の意味を確認すると、「気持ちが良い」「さわやか」などの解答があった。

「generous=気前がよい」ということは覚えることができたとしても、日本語の意味がわかっていなければ意味がない。文章レベルでは尚更、日本語による理解を意識して指導することが必要である。

聾学校やそれを取りまく地域活動の中には熱心な指導者や指導体制により特別な活動で成果を挙げているところもある。東京都の「大塚クラブ」の活動では、週末チャレンジ教室として英語検定、初級英語、キッズ英語の教室が開かれ、小学生に対する英語も始まった。この夏には英語キャンプ“One Day America in Yokohama”が企画され、中2から高校生がアメリカの聾の高校生と交流した。

豊橋聾学校では、近隣の留学生と国際理解交流会を実施したり、外国の聾学校と定期的に派遣交流をしたり、県のスピーチコンテストに出場して受賞したりする活動も報告されている。

華々しい成果は地道な教育活動に裏打ちされて成り立っている。とりわけ確かな日本語（第一言語）教育の上に英語（外国語）があることは言うまでもない。